

一営業マンからみた小学校英語 その後

学校図書 佐々木純也

1 序

本誌の前号(第1号)で私の小英教材販売活動を通じて経験したことや今後についての見通し、さらに私なりの夢を書きました。そして予定されていた通り、昨年(平成21年)4月より学校現場では5年生・6年生に「英語ノート」が配布され、年間35時間の「外国語活動」が始まりました。

本稿では「英語ノート」導入後の現場の様子や今後の見通しを書いてみたいと思います。

前号と同じく一営業マンの狭い見聞による報告ということで、間違いや勘違いなどにつきましてはご容赦ください。

2 「英語ノート」について

今更説明の必要はありませんが、これまで年間35時間の指導実践のなかった学校用に作られたものです。時間数も内容も指導形態もバラバラだった状況に最低限の基準として示されたものです。

菅正隆先生(前教科調査官)によると「教科書ではなく教材的な存在ですので『使わなければいけない』というものではない」そうですが、「どんな授業をすればいいかわからないと不安な先生にとっては、道標になると思います。また、学習指導要領に準拠して作られていますので、中学校の英語教科書ともリンクすると考えられます。『英語ノート』を使った活動をすれば、中学校の英語科と無理なく連携できると思います。」とも言われています。さらに「子どもたちの実態に合わせて、『英語ノート』を改善改良しながら、今まで培ってきた教材も活用しながら、子どもたちに合った、そして学習指導要領の目的に合った活動をしてほしいと思います。『おいしいところ取り』してもらえばいいのです。」とも言われています。

先日の新聞報道では事業仕分けにより廃止の方向が示されたようです。文科省が求めたパブリックコメントには全国から“廃止”に対する反対意見が多数集まったようです。

3 現場の様子

(1) 「英語ノート」の扱い

当然と言えば当然ですが、「英語ノート」を全く使用していない公立地区(学校)はありません。しかし、県市町村の教育委員会の姿勢により若干の差があるようです。

私の目から見ると以下の3パターンに分けられるように思います。

①全面的に「英語ノート」で指導している。

②「英語ノート」の各レッスンを柱にしてカリキュラムを作成し、独自教材や関連する市販教材も使って指導している。

③独自のカリキュラムの中に「英語ノート」の要素を取り入れて指導している。

(2) 関連教材の使用 他

弊社ではMPI(旧松香フォニックス研究所)の小学校英語教材を扱っています。昨年の実績としてはある県一括(中国地方ではありません)あるいは、ある市一括(広島県下ではあ

りません)で数種類の教材を納入できた所もありますが、他は単発の受注が多く全国的には商品の動きが鈍っています。「英語ノート」および「英語ノートデジタル版」の活用で手いっぱいな様子が窺えます。MP Iでは教員研修もサポートできますが、そちらのニーズも「英語ノートの活用法を中心に」という条件が付くことが多い状況です。

(3) ALT

こちらのほうはニーズが高まっているようです。JET (Japan Exchange and Teaching) プログラムや民間委託によるものなど背景は様々ですが確実に増加しています。

平成14年の「英語が使える日本人の育成のための戦略構想」の中でALTの確保が謳われていたことも背景にあるように感じますし、新学習指導要領の解説の中でも必要性を認めていますので今後もニーズは高まると思います。

(4) 疑問や不満

「文科省が外国語活動をやれと言うからやっているが、中途半端な感じがぬぐえない。」「外国語活動(英語ノート)が役に立つのか疑問に思っている。」「年間35時間程度では何も変わらない。」等々、反対派・賛成派の両方から疑問や不満を聞きました。

4 今後の見通し

(1) 教材販売

「英語ノート」が廃止されるかどうかはともかく、平成23年度からは新学習指導要領が実施されます。現在の「外国語活動」がそのまま継続されるわけです。

楽観論に立てば、今後、英語教材のニーズは増えると考えられます。

「英語ノート」の授業を研究会などで拝見する機会がありましたが5年生・6年生の知的レベルからすると全体的に内容が幼いと思います。導入初期だからこそその現象だと思います。日本の子どもたちがこの程度で満足するはずはないし、先生方も同じはずです。ですから仮に「英語ノート」が廃止されなくても先生方の指導力からすると現在の内容程度のレベルでは早晚満足できなくなると思います。

不満を感じる部分を埋めるための教材とカリキュラムが必要になると思います(営業としては是非そうなってほしいと思っています)。

(2) 低学年化

低学年からの外国語活動の実施についての研究が文科省の指導で始まっています。3年生くらいからの実施を目指したものと聞いています。低学年のほうが優れていると言われる言語習得能力を活用するという意味と、知的レベルと学習活動のレベル(歌やチャンツ、あるいは簡単なゲーム活動)を合わせやすいという点から有効ではないかと思われま

(3) ICT (Information and Communications Technology) 教育の普及

—「情報技術を用いて、学習者に新しいコミュニケーション環境を提供しようとする教育」—

「英語ノートデジタル版」の活用がこれに該当します。電子黒板の活用や地デジ対応テレビの活用なども入ります。今後は他の教科も含めてICTの活用が求められると思います。弊社の扱い商品の中では「キッズブラウン」プログラム(韓国の小学校で実施されている英会話習得プログラム)が普及することを期待しています。

5 新学習指導要領について

平成23年度から実施される新学習指導要領の解説書によると、外国語活動の「目標」は「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」であり、この目標は次の三つの柱から成り立っていると解説しています。

三つの柱とは

- ①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

です。

この解説で特徴的に感じるのは、「外国語を通じて」と「体験を通して」が強調されている点です。

また、この解説の中で制約を感じる表現は「③の音声や基本的な表現の習得に偏重して指導したり、『聞くことができること』や『話すことができること』などのスキル向上のみを目標とした指導が行われたりすることは、本来の外国語活動の目標とは合致しない。」という部分です。

次に、「内容」については

1 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、次の事項について指導する。

- (1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
- (2) 積極的に外国語を聞いたり、話したりすること。
- (3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。

2 日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。

- (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。
- (2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。
- (3) 異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。

とされています。

「慣れ親しむ」とか「楽しさを体験する」とか「気付かせる」という表現が多く使われており、「覚えさせる」とか「理解させる」ことに対しては「多くの表現を覚えたり、細かい文構造などに関する抽象的な概念について理解させたりすることは目標としていない。」というように、注意を喚起しています。

他に配慮を求めている部分を見ていくと、「指導計画の作成と内容の取扱い」では1-(3)の「必要以上に細部にわたったり、形式的になつたりしないようにすること」の解説として「単語を複数形にしたり、冠詞を付けたりすることなどを強調したり、知識として理解させたりすること、また、機械的に語句や文を暗記させたりすることなどで、児童の自己表現したいという気持ちやコミュニケーションを図ることへの興味を失わせることのないように留意して指導する必要があること」と示されています。

また、視聴覚教材を扱う場合でも「過度に文字を習得させることや、簡単な定型対話文を過度に暗記させ演じさせることなどを目的にしたものを活用することは、外国語活動の目的にそぐわない。」と注意を促しています。

文字指導に関しては2-(1)-イに「アルファベットなどの文字や単語の扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること。」とあり、その解説として「アルファベットなどの文字指導は、外国語の音声に慣れ親しんだ段階で開始するように配慮する必要がある。さらに、発音と綴りとの関係については、中学校学習指導要領により中学校段階で扱うものとされており、小学校段階では取り扱うこととはしていない。」と配慮を求めています。

6 不思議に思うこと

私は教科書会社の人間ですので指導要領に対してとやかく言える立場ではありませんが、次の二点については不思議に思っています。

1点目はスキル練習に対して否定的な内容に読み取れる点です。

前述した「スキル向上のみを目標とした指導が行われたりすることは、本来の外国語活動の目標とは合致しない。」などの部分です。完全否定されていないことは「スキル向上“のみ”を目標とした」というところで理解できますが、私がお会いした多くの先生は「スキル練習はだめなんですね」と言われています。

「内容」の「(1)外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。」の解説に自転車に乗ることを例にあげて楽しい体験の大切さを説明しています。曰く「自転車の構造や乗り方についての知識がどれだけあったとしても、実際に自転車に乗らなければ、自転車に乗ることができるようにはならず、乗る楽しさも経験することができないということと同じである。」私も全くその通りだと思います。しかし、自転車に楽しく乗れるためには乗るためのスキルも必要です。必要な時間は人によって違いますが練習をしないと乗れるようにはなりません。

全校合唱などを行われている学校も多いと思います。全員で心を合わせて取り組む姿には心打たれます。全員がそろった時の気持ちよさは格別なものがあると思います。その気持ちよさを味わうためにはたくさんの練習が欠かせないのではないのでしょうか。各パートそれぞれのスキルが身につくことで感動が生まれるのではないのでしょうか。同じことは他のスポーツや芸能の世界にも言えると思います。何かを表現するには表現するためのスキルがあるほうが伝わりやすいのは当たり前です。

外国語によるコミュニケーションも同じではないのでしょうか。コミュニケーションを図ることの楽しさを味わうにはコミュニケーションのスキルがあったほうが楽だと思います。

2点目は文字指導についてです。

文字の扱いについても制限が多く書かれています。町中にアルファベットが氾濫している現在、外国語（英語）活動をしながらか文字を扱わないのは不自然に感じます。国語では現在4年生でローマ字を学習しますが新指導要領では3年生に下りています。ローマ字は書けるように指導しながらアルファベットはだめですという理由が分かりません。

もっともこれもスキル練習と同じく完全否定されているわけではありません。音声に慣れ親しんだ後に始めるように注意しているだけです。しかし多くの先生は「文字は扱ってはいけませんね。」と言われます。よりよく理解されるよう願っています。

言語習得は「聞いて」「話して」「読んで」「書く」の順番だと聞いています。ただ、それぞれは重なり合って進行していくようです。「聞く」が終わったら「話す」、 「話す」が終わったら「読む」、 「読む」が終わったら「書く」というわけではなさそうです。その意味で中学校の扱いとされている「文字指導」も小学校から取り組んだほうがいいのではないかと個人的には思っています。